芥川龍之介全集

第二巻

芥川龍之介全集 第二卷　第二回配本（全十二卷）

一九七七年九月十九日　發行©

定價三二〇〇圓

著者　芥川龍之介

發行者　岩波雄二郎

發行所　〒101 東京都千代田區一ツ橋二ノ五ノ五
株式會社 岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六ノ二六二四〇

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

或日の大石内蔵之助　三
田端日記　一八
蛙　二六
女體　二九
片戀　三一
黄粱夢　三九
戯作三昧　四二
「春城句集」の序　八〇
はつきりした形をとる爲めに　八二
ほんものゝスタイル　八五

痛感した危險　八六
首が落ちた話　八八
西郷隆盛　一〇一
英雄の器　一一九
「昔」　一二三
良工苦心　一二六
文學好きの家庭から　一二八
傍觀者より　一三〇
南　瓜　一三五
世之助の話　一四〇
袈裟と盛遠　一五二
文藝雜話　饒舌　一六四
ババベックと婆羅門行者　一七二
イズムと云ふ語の意味次第　一七七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

豐島與志雄氏の事　一七九
地獄變　一八二
眼に見るやうな文章　二二五
蜘蛛の糸　二二七
開化の殺人　二三二
京都日記　二四六
惡魔　二五三
「結婚の前」の評判　二五六
信濃の上河内　二六三
私の好きな夏の料理　二六四
私の好きな夏の女姿　二六五
奉教人の死　二六六
鈴木君の小説　二八一
枯野抄　二八二

邪宗門　二九四
「邪宗門」の後に　三六〇
私の嫌ひな女　三六一
るしへる　三六二
或惡傾向を排す　三六九
永久に不愉快な二重生活　三八一
私の創作の實際　三八三
袈裟と盛遠の情交　三八六
俳畫展覽會を觀て　三八八
一番氣乘のする時　三九〇
「心の王國」の跋　三九四
毛利先生　三九九
犬と笛　四一九
あの頃の自分の事　四三四

同　別稿　四五七
樗牛の事　四六五
兄貴のやうな心持　四七一
小説を書き出したのは
　友人の煽動に負ふ所が多い　四七三
女形次第で　四七六
予の苦心する點　四七八
後　記　四七九

小說隨筆 二

或日の大石内藏之助

立てきつた障子にはうららかな日の光がさして、嵯峨たる老木の梅の影が何間かの明みを、右の端から左の端まで畫の如く鮮に領してゐる。元淺野内匠頭家來、當時細川家に御預り中の大石内藏之助良雄は、その障子を後にして、端然と膝を重ねた儘、さつきから書見に餘念がない。書物は恐らく、細川家の家臣の一人が借してくれた三國誌の中の一册であらう。

九人一つ座敷にゐる中で、片岡源五右衞門は、今し方厠へ立つた。早水藤左衞門は、下の間へ話しに行つて、未にここへ歸らない。あとには、吉田忠左衞門、原惣右衞門、間瀨久太夫、小野寺十内、堀部彌兵衞、間喜兵衞の六人が、障子にさしてゐる日影も忘れたやうに、或は書見に耽つたり、或は消息を認めたりしてゐる。その六人が六人とも、五十歳以上の老人ばかり揃つてゐたせゐか、まだ春の淺い座敷の中は、肌寒いばかりにもの靜である。時たま、しはぶきの聲をさせるものがあつても、それは、微に漂つてゐる墨の匂を動かす程の音さへ立てない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

内藏之助は、ふと眼を三國誌からはなして、遠い所を見るやうな眼をしながら、靜に手を傍の火鉢の上にかざした。金網をかけた火鉢の中には、いけてある炭の底に、うつくしい赤いものが、かんがりと灰を照らしてゐる。その火氣を感じると、内藏之助の心には、安らかな滿足の情が、今更のやうにあふれて來た。丁度、去年の極月十五日に、亡君の讐を復して、泉岳寺へ引上げた時、彼自ら「あらたのし思ひははるる身はすつる、うきよの月にかかる雲なし」と詠じた、その時の滿足が歸つて來たのである。

赤穗の城を退去して以來、二年に近い月日を、如何に彼は焦慮と畫策との中に、費した事であらう。動もすればはやり勝ちな、一黨の客氣を控制して、徐に機の熟すのを待つただけでも、並大抵な骨折りではない。しかも讐家の放つた細作は、絕えず彼の身邊を窺つてゐる。彼は放埒を裝つて、これらの細作の眼を欺くと共に、併せて又、その放埒に欺かれた同志の疑惑をも解かなければならなかつた。山科や圓山の謀議の昔を思ひ返せば、當時の苦衷が再心の中によみ返つて來る。——しかし、もうすべては行く處へ行きついた。

もし、まだ片のつかないものがあるとすれば、それは一黨四十七人に對する、公儀の御沙汰だけである。が、その御沙汰があるのも、いづれ遠い事ではないのに違ひない。さうだ。すべては行く處へ行きついた。それも單に、復讐の擧が成就したと云ふばかりではない。すべてが、彼の道德上の要求と、殆完全に一致するやうな形式で成就した。彼は、事業を完成した滿足を味つたばかりでなく、道德を體現した滿足をも、同時に味ふ事が出來たのである。しかも、その滿足は、復讐の目的から考へても、手段

から考へても、良心の疚しさに曇らされる所は少しもない。彼として、これ以上の滿足があり得ようか。……

かう思ひながら、内藏之助は眉をのべて、これも書見に倦んだのか、書物を伏せた膝の上へ、指で手習ひをしてゐた吉田忠左衞門に、火鉢のこちらから聲をかけた。

「今日は餘程暖(あたたか)いやうですな。」

「さやうでございます。かうして居りましても、どうかすると、あまり暖いので、睡氣がさしさうでなりません。」

内藏之助は微笑した。この正月の元旦に、富森助右衞門が、三杯の屠蘇に醉つて、「今日も春恥しからぬ寢武士(ねぶし)かな」と吟じた、その句がふと念頭に浮んだからである。句意も、良雄が今感じてゐる滿足と變りはない。

「やはり本意を遂げたと云ふ、氣のゆるみがあるのでございませう。」

「さやうさ。それもありませう。」

忠左衞門は、手もとの煙管をとり上げて、つゝましく一服の煙を味つた。煙は、早春の午後をわづかにくゆらせながら、明(あかる)い靜かさの中に、うす青く消えてしまふ。

「かう云ふのどかな日を送る事があらうとは、お互に思ひがけなかつた事ですからな。」

「さやうでございます。手前も二度と、春に逢はうなどとは、夢にも存じませんでした。」

「我々は、よく〳〵運のよいものと見えますな。」

二人は、滿足さうに、眼で笑ひ合つた。――もしこの時、良雄の後の障子に、影法師が一つ映らなかつたなら、さうして、その影法師が、障子の引手へ手をかけると共に消えて、その代りに、早水藤左衞門の逞しい姿が、座敷の中へはいつて來なかつたなら、良雄は何時までも、快い春の日の暖さを、その誇らかな滿足の情と共に、味はふ事が出來たのであらう。が、現實は、血色の好い藤左衞門の兩頰に浮んでゐる、ゆたかな微笑と共に、遠慮なく二人の間へはいつて來た。が、彼等は、勿論それには氣がつかない。

「大分下の間は、賑かなやうですな。」

忠左衞門は、かう云ひながら、又煙草を一服吸ひつけた。

「今日の當番は、傳右衞門殿ですから、それで餘計話がはずむのでせう。片岡なども、今し方あちらへ參つて、その儘坐りこんでしまひました。」

「道理こそ、遲いと思ひましたよ。」

忠左衞門は、煙にむせて、苦しさうに笑つた。すると、頻りに筆を走らせてゐた小野寺十内が、何かと思つた氣色で、ちよいと顏をあげたが、すぐ又眼を紙へ落して、せつせとあとを書き始める。これは恐らく、京都の妻女へ送る消息でも、認めてゐたものであらう。――內藏之助も、眦の皺を深くして、笑ひながら、

「何か面白い話でもありましたか。」

「いえ、不相變の無駄話ばかりでございます。尤も先刻、近松が甚三郎の話を致した時には、傳右衞門殿なぞも、眼に涙をためて、聞いて居られましたが、その外は――いや、さう云へば、面白い話がございました。我々が吉良殿を討取つて以來、江戸中に何かと仇討じみた事が流行るさうでございます。」

「はゝあ、それは思ひもよりませんな。」

忠左衞門は、けゞんな顏をして、藤左衞門を見た。相手は、この話をして聞かせるのが、何故か非常に得意らしい。

「今も似よりの話を二つ三つ聞いて來ましたが、中でも可笑しかつたのは、南八丁堀の湊町邊にあつた話です。何でも事の起りは、あの界隈の米屋の亭主が、風呂屋で、隣同志の紺屋の職人と喧嘩をしたのですな。どうせ起りは、湯がはねかつたとか何とか云ふ、つまらない事からなのでせう。さうして、その揚句に米屋の亭主の方が、紺屋の職人に桶で散々撲られたのださうです。すると、米屋の丁稚が一人、それを遺恨に思つて、暮方その職人の外へ出る所を待伏せて、いきなり鉤を向うの肩へ打ちこんだと云ふぢやありませんか。それも「主人の讐、思ひ知れ」と云ひながら、やつたのださうです。……」

藤左衞門は、手眞似をしながら、笑ひ〳〵、かう云つた。

「それは又亂暴至極ですな。」

「職人の方は、大怪我をしたやうです。それでも、近所の評判は、その丁稚の方が好いと云ふのだか

ら、不思議でせう。その外まだ其の通町三丁目にも一つ、新麹町の二丁目にも一つ、それから、もう一つは何處でしたかな。兎に角、諸方にあるさうです。それが皆、我々の眞似ださうだから、可笑しいぢやありませんか。」

藤左衞門と忠左衞門とは、顏を見合せて、笑つた。復讐の擧が江戸の人心に與へた影響を耳にするのは、どんな些事にしても、快いに相違ない。唯一人內藏之助だけは、僅に額へ手を加へた儘、つまらなさうな顏をして、默つてゐる。——藤左衞門の話は、彼の心の滿足に、かすかながら妙な曇りを落させた。と云つても、勿論彼が、彼のした行爲のあらゆる結果に、責任を持つ氣でゐた譯ではない。彼等が復讐の擧を果して以來、江戸中に仇討が流行した所で、それはもとより彼の良心と風馬牛なのが當然である。しかし、それにも關らず、彼の心からは、今までの春の溫もりが、幾分か減却したやうな感じがあつた。

事實を云へば、その時の彼は、單に自分たちのした事の影響が、意外な所まで波動したのに、聊驚いただけなのである。が、ふだんの彼なら、藤左衞門や忠左衞門と共に、笑つてすませてる筈のこの事實が、其時の滿足しきつた彼の心には、ふと不快な種を蒔く事になつた。これは恐らく、彼の滿足が、暗々の裡に論理と背馳して、彼の行爲とその結果のすべてとを肯定する程、蟲の好い性質を帶びてゐたからであらう。勿論當時の彼の心には、かう云ふ解剖的な考へは、少しもはいつて來なかつた。彼は唯、春風の底に一脈の氷冷の氣を感じて、何となく、不愉快になつただけである。

しかし、内藏之助の笑はなかつたのは、格別二人の注意を惹かなかつたらしい。いや、人の好い藤左衞門の如きは、彼自身にとつてこの話が興味あるやうに内藏之助にとつても興味があるものと確信して疑はなかつたのであらう。それでなければ、彼は、更に自身下の間へ赴いて、當日の當直だつた細川家の家來、堀内傳右衞門を、わざ〳〵こちらへつれて來などはしなかつたのに相違ない。所が、萬事にまめな彼は、忠左衞門を顧て、「傳右衞門殿をよんで來ませう。」とか何とか云ふと、早速隔ての襖をあけて、氣輕く下の間へ出向いて行つた。さうして、程なく、見た所から無骨らしい傳右衞門とつれだつて、不相變の微笑をたゝへながら、得得として歸つて來た。

「いや、これは、とんだ御足勞を願つて恐縮でございますな。」

忠左衞門は、傳右衞門の姿を見ると、良雄に代つて微笑しながら、かう云つた。傳右衞門の素朴で、眞率（しんそつ）な性格は、お預けになつて以來、夙に彼と彼等との間を、故舊のやうな溫情でつないでゐたからである。

「早水氏が是非こちらへ參れと云はれるので、御邪魔とは思ひながら、罷り出ました。」

傳右衞門は、座につくと、太い眉毛を動かしながら、日にやけた頰の筋肉を、今にも笑ひ出しさうに動かして、萬遍なく一座を見廻した。これにつれて、書物を讀んでゐたのも、筆を動かしてゐたのも、皆それ〴〵挨拶をする。内藏之助もやはり、慇懃に會釋をした。唯その中で聊滑稽の觀があつたのは、讀みかけた太平記を前に置いて、眼鏡をかけた儘、居眠りをしてゐた堀部彌兵衞が、眼をさますが早い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com